

キリシタン語学書におけるポルトガル語接続詞 *ou* の職能について

漆 崎 正 人

一 はじめに

『日葡辞書』(1603-4年刊)をはじめ、いわゆるキリシタン語学書においては、ポルトガル語による説明文で、接続詞 *ou* が頻用されている。

例えば、『日葡辞書』の掲出項目「*coio* (恋)」には、*ou* は、

Coio: Amor: ou saudades ruins, 『*Coio: ou suru: Ter amor: ou saudades lasciuas*』

のように二箇所で用いられている。この項目は、『邦訳日葡辞書』(一九八〇年刊・岩波書店)では、

Coio: コイ (恋) 愛情、または、よこしまな慕情。^①『*Coio: ou suru* (恋をする) 愛情、または、みだらな慕情を抱く。

※1原文は *saudades ruins*。このように、恋、に対して、よこしまな、肉欲的な、愛情に限定した注は、次条にも、別条 *Renbo* (恋慕) などにも見られ、羅葡日にもその例がある (*Mimographus*: *Mimus*)。これは清らかな愛、神の愛に対して、人間の男女間の愛を肉欲的なみだらなも

のと見るキリシタンの宗教的な立場からの説明と見られる。これに対して、愛、一般を表わすのには、別条にある *Taixet* (大切) を用いたのであって、羅葡日も同じである (*Amor*: *Pietas*)。

と日本語訳し、*ou* は二箇所とも「または」で訳している。『日葡辞書』の「*coio* (恋)」の項目は、『時代別国語大辞典 室町時代編』第二卷(一九八九年刊・三省堂)の掲出項目「*coio* (恋)」の第一義「特定の異性に心ひかれて、思い慕うこと。また、その切ない思い。」の用例として。

『*Coio* (コイ)。恋心、すなわち、よからぬ思い。「恋ヲスル」。恋心、すなわち、みだらな情を抱く(キリシタンの立場から、神の清らかな愛に対して、人間の、男女間の愛を、官能的なものとして説明したもの)。(日葡)

と引用されているが、ここではいずれの *ou* も「すなわち」と訳しており、『邦訳日葡辞書』とは、著しく異なる解釈を示している。ところで、*ou* は、『現代ポルトガル語辞典』(一九九六年刊、白水社)の掲出項目 *ou* においては、「①または、あるいは、…か

…か。②「同じものを並べて」すなわち、言い換えれば。③「命令文+」そうしないと、さもないと。④「反対のものを並べて」…であろうと…であろうと。」の四義が挙がっているが、「または」は第一義に、「すなわち」は第二義にある。少なくとも現代ポルトガル語では、両義とも認められる語義ということではあるけれども、両義の違いは、「または」は「選択」、「すなわち」は「換言（説明）」という、職能の違いであり、文意の決定的な相違に結びつくので、どのように解釈するかは重要な問題である。

そこで、本稿では、キリシタン語学書において、ポルトガル語の接続詞 *ou* が、どのような職能を担っているかについて検討することにする。

二 キリシタン語学書における接続詞 *ou* に関する先学の見解

キリシタン語学書におけるポルトガル語接続詞 *ou* についての先学の見解として、森田武氏の『日葡辞書提要』¹⁾に示されたものがある。

森田氏は、『日葡辞書』の編者たちが、日本語とポルトガル語との言語上の相違に基づく困難を解決するために講じた対策の一つとして、「接続詞 *ou* による類義語の並示」を挙げ、その働きについて次のように述べている。

ou は、上述の羅葡日の日本語対訳に見ることく、二者択一

的（二者択一的）な意味を示すのが一般的用法で、用例も最も多いのであるが、それを含めてなおさまざまな用い方がなされている。

まず第一には、別義の語を接続するのに用いられた *ou* であって、& (&v) と同様の意味を示す場合である。

Anpu. (安否) *Yasuxiya inaya* (安シヤ否ヤ) ……『また、物事の真実と虚偽 (*Verdade, ou falsidade de cousa.*)

lippu. (実否) *Macotoya inaya* (実ヤ否ヤ) 真実と虚偽と。 (*Verdade, ou falsidade.*)

Vmu. (有無) *Ari naxi.* (有リ無シ) 有るか無いか (*Auer, ou não auer*)。諸か否か (*si, ou não.*)

Fumbet. (分別) 善と悪 (*bem ou mal*) などを理解することか識別するとかすること。

Vnpu. (運否) 良い運と悪い運。 (*Boa, ou má fortuna.*)

上の諸条のうち、*Anpu* と *lippu* については、その訓釈に *yainaya* (ヤ否ヤ) とあるのに惹かれて *ou* を用いたとも解されないことはないが、他にはそのような理由は考えられない。やはり、これらの *ou* は疑問、あるいは、二者択一の意を示すのではなくて、並列・累加の意で用いたものと思われる。並列の場合には & (&v) を用いるのが普通であって、例えば、'*Ienacu* (善悪) に「善と (&) 悪と」'*Nague* (内外) に「内部と (&) 外部と」のような例が多い。それだけに、

上掲の語がすべて別義の語、特に反対の語義をもつ語を連ねている場合であるから、さきにあげた「安否」「有無」「運否」など、*ou* を用いている少数の語例は、やはり一般の *ou* と同じく「……か……か」の意で用いたのかも考えられる。しかしながら、その一方で、まれな特例であるけれども、前述のように & (*et*) と同じように「……と」の意に用いたかと考えられる節がある。

さきに、羅葡日の *Vel* の条に葡語の *ou* と日本語の *Aruiua* (アルイハ) とが対訳として示されていることは述べたが、その条の第2項に、時としては用いられるものとしては、葡語対訳 *Assi, &c.* と日本語対訳 *To, mo.* (ト・モ) という助詞をあげ、それに続けて下のようなラテン語の文例とその葡語訳とが示されている。

maximè me tibi amicum facir, vel virtus vel doctrina tua. Lus.

Assi vossa virtude como saber me vosso amigo.

そしてこれに次の日本語対訳がついている。

ソナタノ善ト、学問ハソナタニ我ヲ親シマスル。

これによれば、ラテン文中の *vel*……*vel* が *Assi*……*como*. (……と同じく、……も……も) と葡語訳され、それが日本語対訳で「善ト、学問(ト)ハ」と訳されていることは明白である。

これによれば、*Vel* と類義の *Aut* にも、これと同様の意味

用法があつて、羅葡日 *Aut* の条に、葡語の *ou*、日本語の「マタハ、或イハ、カ」の対訳を示しているのによれば、それは葡語の *ou* にも受けつがれていたのであろうと考えられる。そう考えることが許されるとすれば、前掲の「安否」「運否」「有無」等の葡語訳中の *ou* は、この助詞「ト」と解して無理なく解釈できるのであつて、一般的に多く用いられる *ou* の意味によつて、「有無」を「有るか無いか、諾か否か」などとするのは穩当とは言ひ難いということになる。この点、邦訳日葡辞書で *Funbet* (分別) の条の *ben ou mal* を「善悪」と訳し、*Vnpu* (運否) の条の *boa ou má fortuna* を「運不運」と訳してあるのは当を得たものとすべきである。

第二には、上のような反対の意味の語ほどに違つてはいないけれども、語義の異なる語句や表現やを接続する *ou* があつて、これは非常に例が多い。

Tenqi. (月) *Mes, ou lha.* (「暦の上の」月、あるいは「天体の」月)。

Lengo (前後) *Maye, Vxiro.* (前後) すなわち「Alo saqi (トサキ) *Diãe, & detas, ou antes, & depois.* (正面と背後と、または、時間的に前と後と)」

Funa asobi. (船遊び) *por mar, ou por rio* (海での、あるいは、河での遊び)

Funabin. (船便) *Porrador por mar, ou occasiõ de Fune.* (海

上運送をする人、または、折よく恵まれた船 (*Fine*) の便。
 このように語義の異なる語・句や表現を接続したものが多
 いが、中には *ou* 以下がその前の語に意味的制限を加えてい
 るものもある。

Fonxen. (本錢) *Caxas, ou moedas de cobre que se dão ou*

empresão ao ganho, i, Cabelal de caxas tirando os ganhos.

この原文中の *dão* (*dar*) は「与える」と訳してはそぐわ
 ないから「手渡す」とでもすべく、それに続く *ou empresão*
 (*empresar*) は「すなわち、貸しつける」とすべきところであつ
 て、前の *dão* (*dar*) はただで与えるのではなくて貸してや
 るのだとしてそれを限定したものである。その関係をおさえ
 た上では「貸与する」とか「貸してやる」とか訳することが
 できる。

利息を取って貸与する錢、すなわち、銅貨、すなわち、
 利子をのけた元金の錢。

第三には、類義の語や表現の接続に用いられた *ou* がある。
Rôxa (籠者)、および、*+ Rôin* (籠人) の条には、ともに
Preso, ou encarcerado。(囚人、すなわち、投獄されている者)
 との説明が付いている。これは同義の語を並示して説明を明
 確にしているものである。これなどは同じ語義を重ねて注
 して明示した趣のものであるが、互いに小異のあるものを
 並べたものもある。*Quangun* (官軍) に *Soldados, ou gente de*

guerra del Rey。(国王の兵士、あるいは、軍勢) のときは、
ou を介して *gente de guerra* を続けることによって、複数の
 兵士たちであるばかりではなくて、集団をなし、編成した隊
 をなしている軍勢である意を補っているのである。*Monjin* (問
 訊) の条に、*Perguntar, ou por duvida*。(質問すること、ある
 いは、疑問を提出すること) とあるが、始めの *Perguntar* は
Tazune, uru。(尋ね、ヌル) の条にも、*Toi, o*。(問い、ウ) の
 条にも用いられている語であり、その他、「問イ掛クル」「問
 イ交ワス」「問イ答ユル」などの条にもあつて、それだけで
 は「問訊」の意味を表わすものとしては不十分である。そこ
 でこれを補うために *Por duvida* (疑問を提出する) を添えた
 と解されるのである。

また、*+ Betbetini* (別々ニ) の条には、*Separadamente, ou*
cada hum sobre si。(別れ別れに、あるいは、それぞれ各個に)
 とある。その *Separadamente* は、物なり人なりがその空間的
 位置を隔ててあるような場合にはよく当たるし、それで通用
 する場合も多いのではあるけれども、例えば

不同トハ習ヒ立ル所ノ業ハ別々ニシテ不同也 (応永本論
 語抄、子路)

のように、各人各様に異なる動作をする場合などには適応
 しない。その故に、*ou* 以下においてこれをも含む意味説
 明が加えられている次第である。*Vchi, vchu*。(打ち、ツ)、

Tataqu. (叩キ、ク)の2条には同じように *Bater ou dar pancada*. (叩く、または、平手でなぐる) という説明がついているが、これもまた補う用に付せられたものである。

ou の沢山の用例の中には、上のように前後の関係が明らかでないばかりではなくて、慎重な考慮を要するものもある。その1例、

Fandan. (判断) Colouati.u. (判り断ル) *Arrezoar como sobre algia demãda, &c. ou determinar, & resolver como juiz.*

の条で、見出し語の「判断」は、落葉集本篇に見える熟字であり、その旁訓も上の訓釈に一致するから、翻字上に問題はない。けれども葡語説明の中間にある ou の接続する部分が明確でない。一見したところ、ou の所で前後に分れるように見えるけれども、前半に *demanda* (訴訟) があり、後半の末に *juiz* (裁判官) があつて意味上の関連がある以上、二部分に分断するのは穩当でない。結局 ou は最初の *Arrezoar* と後半部の *determinar* とを並列的に接続しているものと見なければ意味が通らない。つまり、その関係と解して、

たとえば、裁判官がするように、ある訴訟について理非を正して述べる。あるいは、決定し解決すること。とすればよいであろう。次もまたそれに似た例である。

Funhoi. (不如意) *Cocorono gotocu narazu.* (心ノ如クナ

ラズ) すなわち、*Fubẽna coto.* (不弁ナコト) *Pobreza, ou falta do necessario, ou de poder, & habilidade para fazer alguma cousa.*

問題はこの葡語説明文中の ou の接続関係と、それによる意味の続き具合とにある。このうち最初の ou は *Pobreza ou falta* と見て間違いないが、次の ou は文頭の *Pobreza* に関係づけるのは意味上穩当でない。そこで *falta.....ou falta de poder* と解すべきであろう。その結果、

貧乏、あるいは、生活必需品が欠乏しているとか、何か事をするのに力や能力が欠けているとかすること。

とすれば、原文に忠実なものと言えるであろう。(四三七)

四二ページ)

森田氏は、接続詞 ou によつてどのような表現が並示され、その並示された表現同士が、意味的にどのような関係にあるのか、反意語であるのか、異義語であるのか、類義語であるのかなどに對する関心に基づいて分析を試みている。この見解を、ou の接続詞としての職能という視点で整理すると、森田氏は、ou について、「並列・累加」(「と」、「と……と」)、「選択」(「あるいは」、「または」)、「換言(説明)」(「すなわち」)の職能を認めていることになる。森田氏が認める、ou のこれらの職能のうち、「(二)では、『現代ポルトガル語辞典』などで語義的には職能が認知されていない、「並列・累加」の職能に関して、森田氏の見解を検討する

ことにする。

森田氏は、『日葡辞書』における接続詞 *ou* の機能について、「選択」が一般的な用法で、しかも最も用例も多いと指摘しながらも、掲出項目「あんぷ(安否)」「じつぷ(実否)」「うむ(有無)」「ふんべつ(分別)」「うんぷ(運否)」の各語釈に用いられている *ou* を、「並立・累加」の機能を有する「まれな特例」として挙げているわけである。もっとも、これらのうち、「うむ(有無)」の当該の *ou* は、なぜか、「選択」の機能を示す「……か……か」の日本語訳で森田氏自身が掲げている。森田氏の主張の根拠は、別義の語(特に反意語)を接続するという方法は、*&* (*&*) の用法と同様であること、『羅葡日対訳辞書』(1995年刊)の掲出項目 *Vel* の第一義の対訳としてポルトガル語 *ou*、日本語「アルイハ」が、その第二義の対訳としてポルトガル語 *Assi&c*、日本語「ト、モ」が、それぞれ引き当てられていて、*ou* にも、助詞「ト」に相当する用法が期待できること、の二点である。

まず、森田氏の第一の根拠については、『日葡辞書』の掲出項目に対するポルトガル語説明文において、別義の語(特に反意語)を接続詞によって連ねる場合に、確かにしばしば *&* (*&*) が用いられているけれども、そのような語が「選択」の關係で接続することは論理的に不自然ではないし、そもそも、「並立・累加」の機能で『日葡辞書』で多用されている *&* (*&*) があいながら、一般的には「選択」の機能を有する *ou* をあえて「並立・累加」の

機能で用いることは、明晰さが求められる辞書としては、利用者に誤解や混乱を生じさせる恐れから、編者はむしろ避けるように思われる。次に、第二の根拠について、『羅葡日対訳辞書』の掲出項目 *Vel* の第二義の対訳としてポルトガル語 *Assi&c* (同様に、など)、日本語「ト、モ」を引き当てているのに、それぞれ、*ou* 「アルイハ」が採用されていないということは、*Vel* の第二義は、当時のポルトガル語の *ou* や日本語の「アルイハ」とは全く異なるものであり、それは、対訳として、ポルトガル語 *Assi&c*、日本語「ト、モ」を当てざるを得なかったからにほかならないのである。つまり、ポルトガル語 *ou* は日本語の助詞「と」「も」とに相当する機能は認めたいことになる。したがって、『日葡辞書』において、接続詞 *ou* が「並立・累加」の機能で用いられていることの明確な根拠は存しないのである。

三 キリシタン語学書における接続詞 *o* の機能の検討

語の意義を特定する方法の一つとして、文脈上の整合性から求めていくというやり方が効果が有する場合が少なくないが、接続詞 *o* の機能に関しては、これまで見てきたように、「並立・累加」、「選択」、「換言(説明)」などの機能の判別には、あまり有効性が期待できない。*ou* については、最も確実性が高いと思われる方法は、逐語的に *ou* の対訳として用いられている日本語の語彙の

意義から求めていくやり方である。つまり、*no* に、逐語的に対応する日本語の語彙を、ギリシタン語学書から拾い出し、それらの当時の語義の共通の意義を割り出して、*ou* の職能を説明しようというのである。

なお、本稿で扱うギリシタン語学書は、『天草版ラテン文典』(1594年刊)、『羅葡日対訳辞書』、『日葡辞書』、『ロドリゲス』、『日本大文典』(1604-8年刊)、『ロドリゲス』、『日本小文典』(1620年刊)の五文獻である。

三・一 『天草版ラテン文典』における *ou* と対応する日本語語彙

『天草版ラテン文典』において、接続詞 *ou* が、逐語的に対応する日本語の語彙とともに用いられているのが確実なのは、次の例である。

- ① Vare} Dearu,Aruiua,yru,{¶Eu sou : ou estou. (12―裏)
- ② Nangi} Dearu,A,yru. {Tu es : ou estas. (12―裏)
- ③ Arc} Dearu,A,yru. {Elle he : ou esta. (12―裏)
- ④ Vareta} Dearu,A,yru. {Nos somos : estamos (12―裏)
- ⑤ Nangira} Dearu,A,yru. {Vos sois : ou estais. (12―裏)
- ⑥ Areta} Dearu,A,yru. {Elles sam : ou estaõ. (12―裏)
- ⑦ Vare Nangi Are Vareta Nangira Areta } Dearu,A,deatta,A,yru,yta.
{ ¶Eu era : ou estaua. Tu eras : ou estauas. Elle era : ou estaua.

Nos èramos : ou estauamos. Vos ereis : ou estaueis. Elles eraõ : ou estauaõ. (12―裏)

- ⑧ Vare Nangi Are Vareta Nangira Areta } Deatta,A,yta,{ ¶Eu fui : ou estue. Tu fõste : ou estieste. Elle foi : ou estue. Nos fomos : ou estuemos. Vos fostes : ou estiestes. Elles foram : ou estueraõ. (12―裏)

- ⑨ Vare Nangi Are Vareta Nangira Areta } Deatta,Deatte atta,A,yta,Yte atta,{ ¶Eu fora : ou estuera. Tu foras,ou estueras. Elle fora,ou estuera. Nos foramõs : ou estueramos. Vos foreis : ou estuerreis,Elles foram : ou estueram. (12―裏)

- ⑩ Vare Nangi Are Vareta Nangira Areta } Dearõzu,A,iyõzu,{¶Eu serei : ou estarei. Tu seras : ou estaras. Elle sera : ou estara. Nos seremos : ou estaremos. Vos sereis : ou estareis. Elles serãõ : ou estarãõ. (12―裏)

- ⑪ Iap,Mõfaya de arõzu,A,atte arõzu. Lus,la eu entlam serei,ou estarei. (12―裏)

- ⑫ Nangi} Nite are,nare,A,iyo. {¶See tu ou està. (12―裏)
- ⑬ Arc} Nite areto,nareto,A,iyoto. {Seja elle : ou esteja. (13―裏)
- ⑭ Vareta} Dearõzu,A,iyõzu. {Sejamos nos:ou estejamos. (13―裏)
- ⑮ Nangira} Niteare,nare,A,iyo. {Sede vos : ou estai. (13―裏)
- ⑯ Areta} Nite areto,nareto,A,iyoto. Sejam elles : ou estejam. (13―裏)

⑭ Nangi Are Nāgira Avera, Nite arubexi, Iarubexi, A, ybexi. {¶} Seras tu : ou estaras. Serà elle : ou estarà Sereis vos : ou estareis. Serāo elles : ou estarāo. (31―裏)

⑮ Vare Nangi Are Vavera Nangira Avera, Deatarōtoqi, Deatārōniua, deataraba yocarōmonouo, A, Yarōniua, Ytaraba yocarōmonouo. {¶} Queira Deos q fosse eu : ou estuiesse. Que fosses tu : ou estuiesse. Que fosse elle : ou estuiesse. Queira De' q fossemos nos : ou estuiessemos. Que fosseis vos : ou estuiesseis. Que fossem elles : ou estuiessem. (14―表)

⑯ Vare Nangi Are Vavera Nangira Avera, Deatarōtoqi, Deatōtoqi, A, Yarō toqi, Iyō toqi, Yie cara &c. {¶} Como eu for : ou estuier. Tu fores : ou estuieres. Elle for : ou estuier. Como nos foremos : ou estuieremos. Vos fordes, ou estuierdes. Elles forē : ou estuierē. (15―表)

これらの例のうち、①では、日本語の「Vare (我)」「Deanu (である)」「Aruiua (ある)は」「yru (居る)が、それぞれ、ポルトガル語の「Eu」「sou」「ou」「estou」に対応している。Euは一人称代名詞なので「Vare (我)」とは対訳語の関係にある。souは動詞 ser の一人称直説法現在の語形であり、「estou」は、動詞 estar の一人称直説法現在の語形だから「Deanu (である)」「yru (居る)」「sou (ser)」「estou (estar)」の関係はどう捉えるかが問題となる。ロドリゲス『日本大文典』において「verbo substantiuo (存在動詞)」を列挙した

箇所には、

Arui. Vogiarui. Yru. Gozaru. Naru. Maximasu. Vouaximasu. Voriaru. Nai. Voriui. Gozanai. Saburō. Fanberu. Nari, defectiuo. Sorō, I, sorō. Sō. Zōrō, I, sorō. Estar. Auer.}

Nitearu. De arui. De vogiarui. Nite gozaru. De voriaru. Nite maximasu. Nite vouaximasu. Denai. De voriui. De gozanai. De sorō, I, sorō. De sō. Vataraxe tamō. Imaso cariquerui. Masu. i. Maximasu. Arazu, defectiuo. Ser.} (31―表)

とあり、「Deanu」は Ser の意義を表す語群に、「Yru」は Estar「Auer」の意義を表す語群に、明確に区別され、しかも「Deanu」と「Yru」の関係は「Ser」とEstar (Auer) の関係に相当する、ことを示す方法で置かれていることによれば、①における「Deanu」と「sou」「yru」と「estou」は、それぞれ対訳語の関係にあると解される。したがって「Deanu」と「yru」との関係性を示す「Aruiua」と「sou」と「estou」との関係性を示す「ou」との関係も対訳語の関係としての逐語的な対応関係になっていることになる。

①以外の他の例、すなわち、②～⑨では「ser」「estar」の、それぞれの活用形式に相当する「日本語の「である」「に「てあり」「なり」「たり」」「居る」(「有る」)の表現形式がそれぞれ対比的に挙げられており、おのおのの項において ser の活用形式と estar の活用形式の関係性を示す「ou」と、「である」「居る」等の表現形式の関係性を示す A (Aruiua の略表記形)とは、①の場合と同様

に、対訳語の関係としての逐語的な対応関係にあると判断される。ゆえに、『天草版ラテン文典』において、*ou* に対応する日本語語彙としては、「あるいは」を認めることができる。

三・二 『羅葡日対訳辞書』における *ou* と対応する日本語語彙

『羅葡日対訳辞書』において、接続詞 *e* が、逐語的に対応する日本語の語彙とともに用いられる例には、次のものがある。

- ① *Aut. Lus. Ou. Iap. Matua. aruua. ca.* (訳: *Aut.*、へ1あるいは、または、2それどころか、そのうえまた、いやむしろ、3あるいは少なくとも、4そうでなければ、5………あるいは……)。ポルトガル語。Ou。日本語。マタハ、アルイハ、カ。)

- ② *Casale, is. Lus. Lugar onde se faz, ou guarda o queijo. Iap. Queijo toyû xocubut uo totonoye, aruua torievogu tocoro.* (訳: *Casale, is.* ポルトガル語。……チーズを作る、*ou*、保存する場所。日本語。ケイジヨ(チーズのこと)ト言フ食物ヲ整へ、アルイハ取りテ置ク所。)

- ③ *Funãle, is. Lus. Tochas, ou candeas cubertas de cera, ou de pez. Iap. Maicuyani, aruua rôuo motte coxirayetan vórrassocu.* (訳: *Funãle, is.*、へ1蠟たいまつ、ろうそく。2吊り燭台。)。ポルトガル語。蠟燭、*ou*、松やにで覆わたいまつ、それ

でなければカンテラ。日本語。松ヤニ、アルイハ、蠟ヲモツテ拵ヘタル大蠟燭。)

- ④ *Heredipeta, a. Lus. O que com branduras e lisonjas emgoda os velhos, ou vituas pera que o façam seu erdeiro. Iap. Goge, aruua toxiyorini neigorouo tçucuxi, qini aite sono xôchi zaifõno yuzuruiuo vgenio suru momo.* (訳: *Heredipeta, a.*、遺産目当てのおべっか使い。)。ポルトガル語。相続人になる目的で、老人、*ou*、未亡人を優しいことばとへつらいでます者。日本語。後家、アルイハ年寄ニ懇ヲ尽シ、氣ニ合ヒテソノ所地財宝ノ譲リヲ受ケントスル者。)

- ⑤ *Intercalaris, e. 『Intercalares calende. Lus. Primeiro de febreiro, ou de março, quãdo he anno bisexto. Iap. Vriño toxino Europano niguat, aruua sãguatno tçutachi.* (訳: *Intercalaris, e.*、(暦に) 間として加えられた。)。……『*Intercalares calende.* (閏月の朔日。)。ポルトガル語。閏年である年の、二月一日、*ou*、三月一日。日本語。閏フ年ノエウロパノ二月、アルイハ三月ノ朔日。……)

- ⑥ *Iuro, as. 『Iurare corporalter. Lus. Iurar tocando o altar, ou liuro dos Evangelhos. Iap. Altar, aruua Euangelhono qiommoni teuo caqete xeimonuo taicuru.* (訳: *Iuro, as.*、へ1誓う、誓約する。2誓って保証「断言」する。3共謀する。4「法」*calumniam iurare*(Cic) 善意による告発であることを宣誓す

る。……『Iurare corporaliter. (有形的に誓う。)。ポルトガル語。祭壇^ニ、福音に触れて誓う。日本語。アルタール(祭壇のこと)、アルイハ、エワンゼリヨ(福音のこと)の経文ニ手ヲ掛ケテ誓文ヲ立ツル。)

- ⑦ Que, coniunctio. Lus. ……『Ilem, Ou, lap, Aruiua. (訳: Que, (2語を並列する場合、2番目の語に付ける、語群や文の場合はその先頭の語に付ける) 1…と、また、そして。2…か、または。3…も…も)』 coniunctio. (接続詞)。ポルトガル語。……『また、Ou。日本語。アルイハ。)

- ⑧ Seu. Lus. Ou. lap. Aruiua, ca. vt, soreca, areca. (訳: Seu, (1あるいはもし。2あるいは…か「にせよ」。3あるいは。ポルトガル語。Ou。日本語。アルイハ、カ。例えば、ソレカ、アレカ。)

- ⑨ Sine, coniunct. Lus. Ou. lap. Aruiua, ca. (訳: Sine, (1あるいはもし。2あるいは…か「にせよ」。3あるいは)』 coniunct (接続詞)。ポルトガル語。Ou。日本語。アルイハ、カ。)
- ⑩ Ve. Lus Ou. lap. Aruiua. (訳: Ve. (あるいは、または。ポルトガル語。Ou。日本語。アルイハ。)

- ⑪ Vel. Lus. Ou. lap. Aruiua. …… (訳: Vel. (1お望みなら。2それとも、あるいは。3…すら…さえも。4たぶん、おそらく。5明らかに、文句なく。6たとえば。7とにかく。ポルトガル語。Ou。日本語。アルイハ。……))

これらの該当する例のうち、②、③、④、⑤、⑥の例については、ラテン語の見出し語に対するポルトガル語解説文中で使用されている *ou* に、日本語の語彙が逐語的に対応している場合である。ポルトガル語解説文中の *ou* に、日本語の語彙が逐語的に対応するというのは、三・一の『天草版ラテン文典』のすべて当該例と同様の状況であるが、『羅葡日対訳辞書』でも、全例日本語の「あるいは」が逐語的に対応している。

次に、残りの①、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪の例は、『羅葡日対訳辞書』として、ラテン語の見出し語自体の語義全体、それでなければ、その一義に、ポルトガル語の対訳には *ou* が当てられ、しかも、対訳の日本語の語彙も掲げられているものである。

ラテン語の見出し語の語義全体に、対訳としてポルトガル語の *ou* が採られているのは、①、⑧、⑨、⑩であるが、対応する日本語語彙は、①では「または」「あるいは」「か」、⑧では「あるいは」「か」、⑨では「あるいは」「か」、⑩では「あるいは」が、それぞれ挙げられており、「あるいは」は四例ですべてに、「か」は三例、「または」は一例が用いられている。品詞の次元では「あるいは」「または」は接続詞、「か」は助詞ということで、品詞上は一致しないものの、助詞「か」には、「二者択一」の職能があるから、「あるいは」「または」「か」は、「選択」という職能を有する点で共通しており、そのことはラテン語見出し語の語義とも整合している。ラテン語の見出し語の一義に対訳として *ou* が採

用されているのは、⑦、⑪であるが、⑦、⑪ともに、「あるいは」だけが挙げられている。

したがって、『羅葡日対訳辞書』においては、ラテン語の見出し語の語義の対訳としてポルトガル語の *ou* が用いられている場合に、逐語的に日本語の語彙で対応するのは、「あるいは」「か」「または」の「選択」の職能を持つもののみであり、特に「あるいは」は、他の「または」や「か」が併記されずにそのみで対応している項目があり、しかも「あるいは」だけが、すべての対訳に当てられていること、および、ポルトガル語解説文中に使われている *ou* の対訳日本語として「あるいは」が専用であることから、『羅葡日対訳辞書』の編者たちは、*ou* の対訳日本語として「あるいは」が最も適した語と認めていたと考えられる。

三・三 『日葡辞書』における *ou* と対応する日本語語彙

『日葡辞書』において、接続詞 *ou* が、逐語的に対応する日本語語彙とともに存するのは、以下の項目に見られる。

- ① Angô. 『Angôno tucôca? saimino tucôca? *Quereis que vos ponhão nome dos que acabão em An, ou em Sai.* (訳: 庵^{アン}号^{ゴウ}。.....『庵号ヲ使フカ? 斎名ヲ使フカ? あなたは、名前の最後を庵とする、*ou* 斎とする、いずれを望むか。)』[正篇]
- ② Ariya, jinaia? *Ha, ou naô ha?* (訳: 有^アリヤ、否^イヤ? 有^アる、*ou*

無いか?) [正篇]

- ③ Aruiua. *Ou.* (訳: アルイハ。 *Ou*。) [正篇]

- ④ *Ca. He particula interrogatiua.* 『Item. *Ou. Iy, Pedro ca loão ca maiteomôxe. Dizer que venha ca Pedro, ou loão.* (訳: カ。疑問の助辞。.....『また、*Ou*。例、ペドロカ、ジョアンカ参^マレト申^マセ。ペドロ、*ou* ジョアンがこゝに来るように言^イふこと。)』[正篇]

- ⑤ *Matuaa. Ou, l, e também, e mais isto, e c.* (訳: マタハ。*Ou*、それであれば、そしてまた、このうえさらに、など。) [正篇]

- ⑥ *Moxicua. i, Xijen. Porventura, i, ou, s.* (訳: モシクハ。すなわち、自然。いによつたら、すなわち、*ou* 文書語。) [正篇]

- ⑦ *Tamerai, ô, ôta. Iy, T'ôgocuno xei coreno mite tegica, micatacao tamerai ayaximu tocoroni. Taif, lib 3.4 gte dos reinos do Lesie estado vendo, e duuidando se erão inimigos ou gente de sua parte.* (訳: 躊躇^{タメラ}ヒ、フ、ウタ。.....例、東^{トウ}国^{コク}ノ勢^{セイ}コレヲ見^ミテ敵^{テキ}カ、御^ミ方^{カタ}カト躊躇^{タメラ}ヒ怪^{アヤシ}ムトコロニ。太平記、卷三。東の国の軍隊が見^ミて、敵^{テキ} *ou* 自分の側の軍隊と疑^{ウタガハ}つてゐる。 [正篇]

- ⑧ *Yara.* 『Item, *Palaura de duuidar que se poem no cabo de outra. Iy, Ftidegozaru yara, ixide gozaru yara. Não sei se he homem, ou se he pedra, e c.* (訳: ヤラ。.....『また、他の

こどばの末尾に付いて疑問を表すことば。例、人デゴザルヤラ、石デゴザルヤラ。人、*no*、石、その他、私にはわからない。」「正篇」

これらの項目に存する例のうち、①、④、⑦、⑧の項目は、日本語の見出し語についての日本語例文に対するポルトガル語訳文中で使われている *no* に、日本語の語彙が逐語的に対応している例である。①、④、⑦では、助詞「か」が対応しており、しかも、「……カ……カ」の形式である。助詞「か」が、ポルトガル語の *no* と逐語的に対応することは、『羅葡日対訳辞書』において確認しているので、特に問題はない。ただ、『天草版ラテン文典』や『羅葡日対訳辞書』では、一続きのポルトガル語表現中の *no* の場合、逐語的に対応しているのは「あるいは」ばかりであったこととは異なるが、当時の日本語の状況として、「カ……カ……」形式の方が、「あるいは」よりも適していることがあったということなのであろう。⑧では、助詞「やら」が、「……ヤラ……ヤラ」の形式で、*no* と対応している。助詞「やら」の、この形式での、*no* との対応については、後述するロドリゲス『日本文典』においても、指摘されている。⑧の場合、見出し語としての「やら」自体の語義全体や、その一義ということにおいても、*no* が対訳として用いられていないことが、④の「か」の場合と異なる。「やら」の場合、「……ヤラ……ヤラ」形式を採った時にのみ、*no* との対応関係が存することに基づいていよう。

次に③、④、⑤、⑥の項目では、日本語の見出し語自体の語義全体、または、その一義に、ポルトガル語の対訳として *no* が用いられている。③、⑥では、見出し語の語義全体に、ポルトガル語の対訳として *no* が当てられているが、③、⑥の見出し語は、それぞれ、「あるいは」、「もしくは」である。「もしくは」に関しては、『天草版ラテン文典』や『羅葡日対訳辞書』に対応するものが見られなかった。③では、見出し語の「あるいは」に対して、*no* 一語のみで説明していることから、*no* の語義全体が、少なくとも最も一般的な意義が「あるいは」の語義に相当することは疑いない。⑥では、見出し語の「もしくは」に対して、まず〈多少の可能性を有する選択肢〉であることを意味するポルトガル語を当て、それは要するに、*no* の意義に含まれること、さらに、見出し語が「文書語」であることを示しているから、そのような点で、「もしくは」の語義全体に *no* は条件付きで対応していることになる。④、⑤の項目では、日本語の見出し語の語義の一義に、ポルトガル語の *no* が逐語的に対応している。④の見出し語は助詞の「か」、⑤の見出し語は「または」であり、これらは既に『羅葡日対訳辞書』において、*no* との逐語的対応関係が確認されていたわけであるが、『羅葡日対訳辞書』では、「か」や「または」の *no* との逐語的な対応の頻度が、「あるいは」には及ばないことと、*no* との逐語的な対応があるのが「か」「または」のそれぞれ一義にとどまっていることが関わっている。

②の項目では、日本語の見出し語を構成する表現の一部の「……ヤ……ヤ」が *ou* に逐語的に対応している。これも『日葡辞書』にのみ見られる対応関係である。『日葡辞書』の見出し語「や」においては、

Ya, *Particula interrogativa*. (訳: ヤ。疑問の助辞。)[正篇]

とあるだけで、*ou* との関係性に関わる指摘がないので、助詞「や」については、「有^アりや、否^ナや。」のような慣用的な表現など一部の限られた表現にしか見られない使われ方と捉えられていたと考えられる。

このように、『日葡辞書』では、『天草版ラテン文典』や『羅葡日対訳辞書』と比べると、*ou* に逐語的に対応する日本語の語彙の例数自体は少ないものの、異なり語数は、むしろ『日葡辞書』の方が多し。このことは、『天草版ラテン文典』や『羅葡日対訳辞書』では、手順として、ポルトガル語の方が優先されて、まず *ou* が採られ、次に逐語的に対応する日本語語彙が選ばれるのに対し、『日葡辞書』では、日本語の語彙の方を主体としているために、日本語語彙のあり方の反映として、結果的に、日本語の見出し語に、*ou* が逐語的に対応する語彙が多く立つことになったと解される。

三 四 ロドリゲス『日本大文典』における *ou* と対応する日本語語彙

ロドリゲス『日本大文典』において、ポルトガル語の接続詞 *ou* が、逐語的に対応する日本語の語彙とともに存するのは、以下のものである。

- ① Ca, ca. *Ou*. (76 丁裏)
- ② Aruiua. *Ou*. (76 丁裏)
- ③ Ca, ca. *Ou*. (134 丁裏)
- ④ Aruiua. *Ou*. (134 丁裏)
- ⑤ Moxiua, moxiua. *Ou*. (134 丁裏)
- ⑥ Yara, yara. *Ou*. (134 丁裏)
- ⑦ Ya, inaya. *Se, ou nã*. (訳: ヤ、イナヤ。である‘ou’ではない。)(134 丁裏)
- ⑧ Ca, inaya. *Se, ou nam*. (訳: カ、イナヤ。である‘ou’ではない。)(134 丁裏)
- ⑨ Pedroca, Antonica. *Areca, coreca. i. Pedro, ou Antonio, isso, ou aquillo*. (訳: ペドロカ、アントニオカ。アレカ、コレカ。すなわち、ペドロ、*ou*、アントニオ、それ、*ou*、あれ。)(134 丁裏)

これらの例のうち、⑨に見られる例は、ポルトガル語訳文中の *ou* に、日本語用例文中の語が逐語的に対応しているが、他の①～⑧では、すべてそれぞれの日本語掲出語に対して、*ou* が対訳語として当てられている。

①～⑧のうち、まず①と②に関しては、*Da conjunção*（接続詞について）の、*Distinctive*（離接）の項目において、ポルトガル語に当たるものとして、“カ、カ”、“アルイハ”が挙げられている。「か、か」及び「あるいは」は、語句や文を選択的に接続する「離接接続詞」の職能を有し、ポルトガル語の *e* に対応するものと捉えられているわけである。③～⑧は、*Da conjunção setima parte da oração*（文を構成する七つ目の成分の接続詞について）の章における *Da conjunção disjunctiva*（離接接続詞について）の条で、「離接接続詞」として、具体的な日本語語彙で *ou* と対応しているものである。*ou* に対応しているのは、③では、“カ、カ”、④では“アルイハ”、⑤では“モシハ、モシハ”、⑥では“ヤラ、ヤラ”であり、⑦、⑧では、それぞれ“ヤ、イナヤ”の“ヤ……ヤ”、“カ、イナヤ”の“カ……ヤ”である。③、④は、それぞれ①、②の再掲になるが、「か、か」、「あるいは」に関しては、*ou* との対応関係は、既に他の複数のキリシタン語学書においても確認済みである。⑤～⑧は、ロドリゲス『日本大文典』としては、この条ではじめて指摘したものであるけれども、⑥の“ヤラ……ヤラ”形式、⑦の“ヤ……ヤ”形式は、『日葡辞書』にも存した。⑤の“モシハ、モシハ”、⑧の“カ……ヤ”は、キリシタン語学書としては初出であることからすれば、ロドリゲスは、「離接接続詞」の多様な語彙を示そうとしたということになる。

⑨には、日本語例文中に、“カ……カ”が二例あり、ともにそのポルトガル語訳文中の *e* が対訳語になっており、既に見てきたことから、“カ……カ”が逐語的に *e* に対応するのは特に問題はない。

ところで、この「離接接続詞について」の条においては、特に注意を払うべき語として、ロドリゲスは、数語に関して詳述しているが、その最初に「か」を取り上げ、

『*He disjunctiva, significa. Ou, aut, e se pospoem á dicção a que se ajunta, e se repete*（訳：Ou' aut <ラテン語で「あるいは」の意を有する>を意味する離接（接続詞）であり、加えられたことばの後に置かれて、繰り返される。）（135丁表）

と述べている。「か（か）」が、ロドリゲス『日本大文典』では、「離接接続詞」を扱った際に、常に必ず、まず第一に取り上げられているのは、「選択」職能を有する *e* に相当する「離接接続詞」として、この形式が当時最も一般的であると判断されたからであろう。

一方、「あるいは」は、「離接接続詞」を扱ったところでは、すべての箇所で、「か（か）」の次に置かれている。「離接接続詞について」の条の「あるいは」の特徴を詳述しているところには、

『*Esta propriamente he disjunctiva sem outro nenhum sentido, porque, Ca, posto que he disjunctiva, tem certa enfasi, e sentido que nam tem, Ardua*（訳：他のどんな意味をも持たない、正

しく離接（接続詞）である。というのは、カは、離接（接続詞）ではあるものの、ある種の強調、及びアルイハの持つていない意味を持つているからである。）（135丁表）

と述べ、「か」が、「離接接続詞」としての職能のほかにも意義を有し、多義的であるのに対し、「あるいは」の方は（ouに対応する）「離接接続詞」としての職能のみを有していることを指摘しているのである。

したがって、ロドリゲス『日本大文典』における、「か（、か）」「あるいは」のこのようなありようから、ouの職能を有する当時の日本語の語彙の中では、最も一般的なのは「か（、か）」ではあるけれども、「か」が多義的であるゆえに、他に紛れようがないという点では「あるいは」がouと最も同義的であるということになるわけである。

なお、『羅葡日対訳辞書』と『日葡辞書』では、ouに逐語的に対応する日本語の語彙に、「または」が含まれていたが、ロドリゲス『日本大文典』では、「または」は該当していない。ロドリゲス『日本大文典』においては、「または」は、*Da conjuncam*（接続詞について）の *Distinctue*（離接）に「応置かれているもの、対訳語として ou は用いられず、

Matana E tambem.（訳：マタハ。そしてまた。）（76丁裏）とあり、当該の対訳語の *E tambem*. は、同じ *Da conjuncam*. の *Copulatiuae*.（連結）に配置されている「また」の対訳、

Mata. E. tambem. & mais.（訳：マタ。そして、また、そしてさらに、もう一度。）（76丁裏）

の一部とほぼ一致しており、「選択」ではなく、「並立・累加」の意味が当てられている。さらに、*Da conjuncam setima parte da oracam*.（文を構成する第七の成分の接続詞について）の章においては、「離接接続詞」についての条にはなく、*Da conjuncam copulatiua*.（連結接続詞について）の条で、「連結接続詞」として、

Mata. E. & tambem. mais. outra vez.（訳：マタ。と、そして、また、さらに、もう一度。）

Matana. Idem.（訳：マタハ。同上。）（136丁表）

とあり、「または」は、「また」と全く同一の職能を有すると見做されている、もっとも、「離接接続詞」としての「あるいは」について詳述している箇所では、

『*Mata. Matana. myrtas vezes se acham com sentido disjunctio, antecedendo lne alglias vezes. Aruiua*.（訳：マタ、マタハは、し

ばしば離接の意味であり、時にはアルイハが先立つ。）（135丁裏）

とも述べ、「また」「または」の「離接接続詞」としての職能も認めてはいる。結局、ロドリゲスは、多義性を有する「または」について、「並立・累加」の職能を本質的と判断して、「または」を「連結接続詞」に配置する決断に至ったものと思われる。

三・五 ロドリゲス『日本小文典』における *ou* と対応する日本語語彙

ロドリゲス『日本小文典』において、ポルトガル語の接続詞 *ou* が逐語的に日本語の語彙と対応している例には、次のものがある。

- ① *Matana. Ou.* (58丁裏)
- ② *Arinha. Ou.* (58丁裏)
- ③ *Ca. Ca. Ou. Ou.* (58丁裏)

これら①～③は、いずれも、*Da conjunção, 8. parte da oração.* (文を構成する第八の成分の接続詞について)の条の「*Disjunctivas* (離接(接続詞))」の項目に挙がっている。ポルトガル語の *ou* が、「マタハ」、「アルイハ」、「カ、カ」に対応していること自体に関しては、複数のキリシタン語学書にあることを既に確認しており、そのことは、特異ではない。ただし、ロドリゲス『日本大文典』との比較という視点に立てば、①で「マタハ」が *ou* と対訳関係とされていること、③で、「カ、カ」のそれぞれの「カ」に *ou* が対応させられていることが違いとして注目される。

まず、「または」については、『日本大文典』では、「また」と同一の機能を有すると見做されて、*Da conjunção seina parte da oração.* の章で、ともに、「連結接続詞」という視点で扱われがちであったが、『日本小文典』では、「また」は、当該の接続詞の条

の「*Copulativas* (連結(接続詞))」の項目に、

Mata. Et. E. Item, mais. (訳：マタ。と。そして。同様に、さらに。)
(58丁裏)

と置かれ、明確に区別され、両語のうち、「または」の方を、配置換えしている。「または」に関しては、「選択」の機能の方が一般的だと判断して認定を変更したのである。

③に関しては、助詞「か」が「選択」として機能している場合、「……カ、……カ」の形式も「……カ、……」の形式も存することを踏まえて、それぞれの「カ」に、*ou* を当てる方法をとったのであろう。

要するに、ロドリゲスは、『日本大文典』の抄出として執筆した『日本小文典』では、「離接接続詞」としては、『日本大文典』の修正も加味し、ポルトガル語の *ou* と逐語的に対応する日本語の語彙のうち、「または」、「あるいは」、「か(、か)」の三語に絞り込んで示したのである。

四 おわりに

以上、キリシタン語学書におけるポルトガル語接続詞 *ou* が、どのような機能を担っているかについて検討してきた。

キリシタン語学書における *ou* に関して、既に示されている先学の見解では、「選択」のほかに、「並立・累加」や「換言(説明)」

の職能を有していると主張されているが、少なくとも、「並立・累加」の職能についてはその主張に明確な根拠がないことを明らかにした。

本稿では、キリシタン語学書における接統詞 *on* の職能を検討する方法として、*on* と対訳関係にある日本語の語彙を拾い出すというやり方を用いた。

キリシタン語学書、具体的には、『天草版ラテン文典』、『羅葡日対訳辞書』、『日葡辞書』、ロドリゲス『日本大文典』、ロドリゲス『日本小文典』を調査した結果、*on* に逐語的に対応している日本語の語彙として、「あるいは」、「か」（か、か）、「か、や」、「または」、「もしくは」、「または」、「や、や」、「やら、やら」が該当することがわかった。これらのうちには、多義的であったり、文語的であったりなどするものも存するが、いずれも「選択」の職能という共通性で、*on* の対訳語となっていることが判明した。とりわけ、ロドリゲス『日本大文典』で指摘しているように、「並立・累加」や「換言（説明）」の職能を持たず、「選択」の職能しかないと思われる「あるいは」が、*on* 以外の他のポルトガル語とは逐語的に対応する例が存しないことから、キリシタン語学書における *on* の職能も「選択」だけということになるわけである。

ゆえに、キリシタン語学書において、ポルトガル語接統詞 *on* が、文脈上、「並立・累加」や「換言（説明）」の職能として解釈できそうな場合であっても、少なくともキリシタン語学書では *on* が

「選択」の職能しか持っていない以上、*on* が「選択」の職能であることを前提にして、文脈の把握をしなければならないのである。

注1 一九九三年刊・清文堂出版。

注2 『羅葡日対訳辞書』のラテン語の見出し語の和訳語義は、特に言及しない限りは、『羅和辞典（改訂版）』（二〇〇九年刊・研究社）によっている。

注3 『羅和辞典（改訂版）』及び、他の辞書にも、管見の範囲では、当該見出し語が見出せない。

〈うるしぎき まさと／本学教授〉